

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## 梅棹忠夫の「ビジョンカ」

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-02-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小長谷, 有紀 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/4851">http://hdl.handle.net/10502/4851</a>

梅棹忠夫とは  
何者だったのか

# 梅棹忠夫の「ビジョン力」

国立民族学博物館には「梅棹忠夫アーカイブズ」という知の玉手箱がある。梅棹本人の記録し、整理していた資料は、実に多岐にわたり、みんぱくの歴史をひもとくうえでなくてはならないものだという。それはすなわち梅棹忠夫の人生の記録でもあり、「知的生産」の宝箱でもあった。

二〇一二年三月から国立民族学博物館で開催される「ウメサオタダオ展」を前に、本展の実行委員長である小長谷有紀氏に、今、梅棹忠夫に着目することの意義を聞いた。

小長谷有紀

[Konagaya Yuki]

## 日々発見

私はモンゴル研究をしていることもあって梅棹先生の弟子のように書いていただくこともあるのですが、世代的には孫くらいに当たり、先生の現役の頃に直接薫陶を受けるようなチャンスはありませんでした。

『梅棹忠夫著作集』（全三巻 別巻一 中央公論社 一九八九年〜一九四〇年刊行）を編集するとき、もう目が見えなくなっていた先生は、メモやデータを整理して再構成するサポートを必

要とされていました。そのモンゴル研究のまとめのお手伝いをするようになったのが、私の国立民族学博物館（以下、みんぱく）での初仕事でした。

メモを見て、当時、先生が何を考えていらしたかをたどる。生資料に当たるところからお付き合いさせていただき、著作ができ上がっていくプロセスを共有することで、同時代を生きたかのような濃密な時間を過ごすことができました。

今回、みんぱくで梅棹先生の特別展をやるとういうこ



とになり、その実行委員長の任に就いて、今度は先生のすべての仕事、人生の全足跡を追う新たな「探検」が始まりました。

この探検が、とにかくおもしろいのです。先生は徹底した記録魔だったので、膨大な資料が実にこまごまと残されています。そこに踏み入り、その「知的生産」を支

えていたもの、背後にあったものを一つひとつ読み解いていく。日々新たな発見があり、驚きや喜びがある。これを一人占めしていたのではもったいないと、実行委員のメンバーに「今日はこんなことを見つけた」と報告する「今日の発見」メールを送って情報を共有しています。今回の「ウメサオタダ才展」は、観に来てくださる方

たちにもそんなワクワクした発見を共有していただけるものになると思います。

### 「ビジョン力」で駆動していた人

今あらためて感じるのは、梅棹先生がいかに「ビジョン力」の人であったかということ。中学のとき、山の好きだった梅棹少年は、

ガリ版刷りで『山城三十山記』という本をつくりまします。これが人生最初の本づくりになるのですが、そのあとがきに「実に山は一大総合科学研究所であります。この研究所で、もっとうんとたがいに山を研究し、知識をまそうではありませんか」



『山城三十山記』 写真：国立民族学博物館提供

と書いてある。中学生にしてへたがいに知をまそう〜というのですから驚きです。もうこの時点から、本を書いて世の中に自分の知見を発信していくという人生のビジョンの第一歩が見えていたかのようです。

高等学校時代は二度落第して、除籍になりそうになっていますが、それは山にばかり登っていて、ろくに学校に行っていないからです。この頃はもっぱら植物採集に勤しんでいました。その理由もふるついています。大学では

動物学を専攻するつもりなので、高校時代のうちに植物の知識を身につけておこうと思っただけです。現代の子どもたちもこうした発想を知ったら、あれもこれもと欲ばりに、大きな夢をもって生きていくきっかけになるのではないでしょうか。

卓越した「ビジョン力」は、もちろん世の中にも向けられます。たとえば、『知的生産の技術』の中で、〈やや先ばしつたいいかたになるかもしれないが、(中略) コンピュータのプログラムのかきかたなどが、個人としてのものもっとも基礎的な技能となる日が、意外にはやくくるのではないか〉と書いてあります。四十年後の現在、まだ先走っていますね(笑)。

日本語ローマ字論者でもありました。戦後、そういうラジカルな運動が強まった時期があったのです。普及してないようできて、実は、今パソコンを使うとき、ほとんどの人がローマ字入力をしています。なんのことはない、実際にローマ字を使うことで、閉ざされた言語としての日本語の障壁を乗り越えているわけです。そういう意味でも先見性がありました。

あるいは、「妻無用論」では、〈過去の女性は不発弾

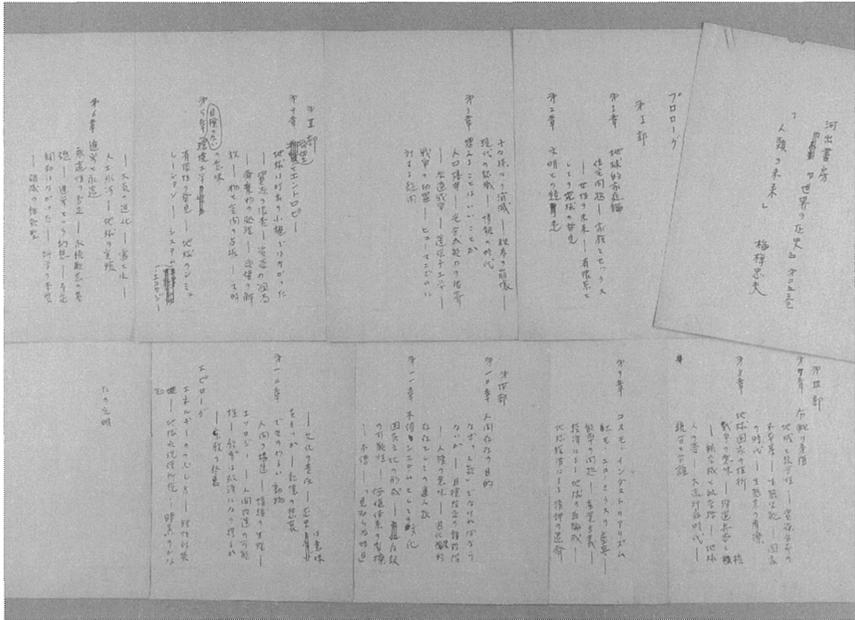


梅棹資料室に並ぶ本棚。全著作がそろ

で、これからのへ女性性は爆発する」と書きました。家事以外のことで才能を発散させるべしという扇動です。男女の役割の差がなくなると喝破した先見性のある知見でしたが、一九五九年に口にするのは早すぎた。批判的投稿が山ほど来て、これには本人もかなり落ち込んだそうです。

ちよつと先を走っている程度の先見性ならみんながついていけるのですが、梅棹先生の場合はざつと五十年くらいも先を行っているので、なかなか理解されない。「必ずこうなっていく」とアジテートしても、みんながついてこない。そこは早すぎたデメリットで、本人はとてつもなくゆかったと思います。

何でも記録して残しておく習癖



幻の書『人類の未来』目次原稿 写真：国立民族学博物館提供

は、自分に対する反論とか批判の類にも及んでいきます。「引紹批言録」と題されたファイルがそれで、その中には自分の意見を引用、紹介しているもののみならず、批評や言及についてもすべて収められています。

徹底して集めて残す一方で、「もういい」と思うと惜しげもなく捨ててしまふところもあります。元祖「断捨離<sup>①</sup>」とでもいいますか、捨てることは整理の一つです。子どものころの昆虫標本も、語学習得のためにつけた単語帳も、潔く捨ててしまふ。そして持たないことがいかに爽快か、〈無所有の快感〉があると表現しています。

よろず「こうすべきである」と説く孔子タイプではなくて、老荘思想にひかれていて、どこか諦念がありました。

ビジョンといえば、『人類の未来』という本を書こうとされたことがあつて、小松左京さんと対談されたりして構想を練っていらした。残念ながらこの企画は日の目を見ることがありませんでしたが、そこで書こうとしていた未来として何年ぐらい先を想定していたか。これが「二百万年先」だということです。もう人間なんか存在し

ていないだろうという未来。そういうスパンで物事を見据えようとしていた人なのです、梅棹忠夫という人は――。

**みんなは「博情館」、市民の厨房だ**

今、時代が非常に内向きになっています。縮こまっている。そういう時代にはやはり「ビジョン力」が必要です。時代と空間にビジョンをもつて接していく、そういう生き方を体現していたのが梅棹忠夫であり、ビジョンを持つことのおもしろさ、楽しさを伝える場にしたかった梅棹先生が考えていたのが、みんなくなのです。

博物館は知を普及させるような場ではない。市民の研究所だ。素材を提供して感動や驚きを感じてもらい、そこからそれぞれが何かを考え、生み出すような情報を発信するところだ、という信念をもっておられました。国立民族学博物館という角ばった硬い名称をもったこの施設を月刊誌では「みんなく」とあえてひらがなで称し、情報を発信する博物館、「博情館」とも言っています。

私は、創設者のこうした信念を、いまふうに少し言い換えてみたいと思っています。私たち研究者が調べたこ

とを料理して、「どうぞお召し上がりください」と皆さんに食べていただくレストランというよりも、「こんな食材がありますよ」と情報を提供して、皆さんそれぞれに料理をつくってもらう「市民のための知的厨房」<sup>ちゆうほう</sup>「みんなのための知的キッチン」というわけですね。

梅棹先生の残した膨大なアーカイブズを「食材」とする「ウメサオタダオ展」、ぜひこの厨房に食材を求めに來ていただきたいと思えます。斬新な知見を次々と生み出した梅棹先生の「知的生産」のエッセンスに触れ、思考のプロセスを生で見えて、「ビジョン力」つまり「未来へのイマジネーション」をかきたてていただければと思っています。(談)



こながや・ゆき

1957年大阪府生まれ。81年京都大学大学院文学科卒。86年同大学大学院文学部研究科博士課程満期退学。同大学文学部助手を経て、87年より国立民族学博物館。専門分野は文化人類学、文化地理学、モンゴル・中央アジアの遊牧文化。著書に『モンゴル万華鏡—草原の生活文化』(角川選書、1992年)、『モンゴルの二十世紀—社会主義を生きた人びとの証言』(中央公論新社、2004年)など多数。